

ましたが、見つかりませんでした。

空襲が終わり、みんな呆然としていました。火は丸1日、燃えていました。辺り一面が焼け野原で、唯一コンクリートできている電柱だけがろうそくのように燃え残っていました。わたしが体験した戦争の中で一番恐ろしいと感じた日でした。

困窮する生活

空襲で家がなくなり、休む場所をつくるため焼け落ちた柱などの材木を集めてまわりました。焼け跡を見ていて手ごろな木があるように見えたため、それをつかみましました。引き抜こうとしたら脂で手がすべり、よく見たら人の手でした。人の手が焼け、材木に見えたのです。焼け残った材木にトタン板を乗せて、しばらくは生活していました。わたしたちだけではなく、周囲に家は残っておらず、だれもが焼け跡で苦し



「空襲の業火からにげる人々」提供：ピースおおさか



「空襲による火災の消火にあたる人々」提供：ピースおおさか

い生活を送っていました。

警防団か軍隊かはわかりませんが、炊き出しがありました。みんな焼け跡から鍋のつぶれたもの、井の残っているものを拾い、並びに行きました。ドラム缶の上に大きな釜をのせて、そこから柄杓ですくい入れます。しかし、おわんに注いでくれたのは、具はおろか米つぶも見えない白いお湯でした。「(釜の中には)お米が入ってるはずなのに。」と言うと、おわんの中の5、6個の米つぶを指さされました。

それでも、飲んではずぐに後ろに並び、「もう1杯ちょうだい! もう1杯ちょうだい!」と言いました。当時はそのような状態でした。

終戦の日

昭和20年8月15日、終戦の日。正午にラジオを通じて天皇陛下から大切なお話があるということで、数少ない貴重なラジオを街頭に出し、子どもも大人もみなで聞いていました。

しかし言葉が難しかったため、子どもにはわかりませんでした。周囲の大人たちの顔色やざわめきなどから、日本が負けたことを知りました。それを聞いた時、体の力が抜けました。これまでの戦争とは何であったのかということを考えました。兄が中国で戦死し、家を焼かれ、気が抜けてしばらく呆然とするしかありませんでした。



「焼け跡の処理に向かう人々」提供：ピースおおさか

今、平和であることの喜び

今が一番幸せです。今、平和に生活できるという幸せを、毎日かみしめています。みなさんにも平和であることの喜びを忘れずに過ごしてほしいと思います。学校から帰ってすぐにゲームや、1日遊んでおこうなどではなく、それも1日の過ごし方ですが、もう少し平和をかみしめて過ごしていただきたいと思います。無駄なことや悪いことに使われると、戦時中に亡くなられた方に申し訳なくなります。少しでもそのようなことを考えて勉強にはげんでもらえたらうれしいです。わたしたちの時代は勉強したくてもできませんでした。「これはゼロ戦に積む無線機やから、自分の命より大事

なんや。」と教えられ、そればかりを朝から晩までつくっていました。当時のことを思い出すと、本当に今は幸せだと感じます。



「焼けた道頓堀川付近」提供：なにわ堀江 1500

戦争を知らない世代へのメッセージ



ふだんは小学校でお話をしていますが、今回中学生の生徒さんもとて真剣に聞いてくださいました。少しでも有意義に活用していただければと思います。

当時、わたしたちの世代は軍国主義に洗脳されていました。全てが「お国のため」となり、国民全員が自分を捨てて、戦争というものにめりこんでいました。今のような平和な時代に考えておいていただきたいことは、どんなことがあっても「話し合う」ことです。つきつめて話し合っ、平和について常に考えるように過ごしていただきたいです。平和を求めていていただきたいですね。

もしも学校で「いじめ」があったとして、「あの子が悪い」「あいつをやろう」ではなく、おたがいに話し合いをしていただきたいです。話し合いを行うことが、平和につながっていくと思います。

「戦争」という言葉をこの地球上から無くせるような考えを持って、これからの世を過ごしてほしいですね。